

世界の バスケットリー × バスケットリーの 世界

海の民とバスケットリー

小野 林太郎
民博人類文明誌研究部

バスケットリーは海とともに暮らす人びとの生活のなかにも存在する。植物を編み組みして作られ、漁や航海の際になくならない道具として使用されているのだ。本稿ではそんな海のバスケットリーの多様性を紹介したい。

東南アジア島嶼部からオセアニアにおける海域世界には、海や沿岸環境での暮らしに特化した海民ともよべる人びとが各地に見られる。東南アジアでは、フィリピン南部からマレーシアのボルネオ島、および東インドネシアの島々に広く暮らし、かつては家舟居民や専業漁師として知られたサマ（バジャウ）人はその代表格だろう。一方、オセアニアの島々では、限られた陸上資源を補うべく、先史時代から海産資源が重要な役割を果たしてきた。特に離島域では、今でも島民によるさまざまな漁撈活動が活発におこなわれている。ここでは、そんな海の民にまつわるバスケットリーを紹介してみたい。

ラタンを使った笥と籠
バスケットリーとしての漁具を代表するのは、何といっても笥（かき）であろう。マレー語ではブブとよばれることが多い。ボルネオ東岸に暮らすサマ人も

罫漁にブブを使うことがあるが、近年ではむしろ大型化がより容易な籠の利用が一般的だ。笥漁は、淡水域で発達したこともあり、ボルネオでは熱帯雨林や内陸地に暮らすダヤク族らも多様な笥を製作・利用してきた。その多くはタケがおもな素材となり、ラタン（籐）は部分的に利用されるのが一般的だ。これに対し、海の民であるサマ人は、籠や漁に使うロープとして、ラタンを好んで利用する。これらのラタンは通常、舟でアクセスしやすい沿岸近くの森林や彼らの村落がある島内で採集したものである。しかし、サマ人が漁に使う籠の素材も、近年では金属や化学繊維が主流となりつつある。



海ダヤク族のタケ製笥 (H0002596)



上：アタフ環礁島の沿岸部に育つタコノキ（ニュージーランド、トケラウ諸島、2008年）
下：サマ人作製のタコノキの葉で編まれた敷物（H0198217）

それでもラタン製の籠は、サマ人の伝統的な商品である塩干魚の運搬用に利用されたりしている。こうした風景は、土地をたぬことも多いサマの漁民や、かつての家舟居民も森林資源を積極的に利用しながら海辺での暮らしを営んできたことを想起させてくれる。

タコノキと多様な利用
東南アジアからオセアニアの島々での生活に欠かせない植物がタコノキ（パンダナス）だ。沖縄でもアダンとして知られるが、マレー語ではパンダンとよばれ、学名となるパンダナスの語源にもなっている。タコノキは熱帯や亜熱帯の沿岸域を好み、海水への耐性も強い。またその葉は強く、しなやかで編みやすく、古来、バスケットリーの材料としても利用されてきた。タコノキは、バレーボール程

の大きさの実をたくさんつけることでも有名だが、ポリネシアやミクロネシアの島々では、食用としても利用されてきた。黄色に熟した果肉はほのかに甘く、デザートとして食べられている

といった印象だ。しかし、バスケットリーとのかかわりでより重要なのは、その葉を編んで作られた敷物であろう。東南アジアのサマ人は切り取った葉を染色したうえで、編み込み、美しい文様の敷物を作ることもある。家舟や杭上家屋で暮らす際には、こうした敷物が寝る際にも大いに役立ったことであろう。ほぼ同じような利用法は、オセアニアの各地でも見られる。西ポリネシアにあたるサモア諸島の約五〇〇キロメートル北に位置するトケラウ諸島の環礁群でも、タコノキは重要な植物資源として認識されている。その実は食料として、フルーツのように食される。一方、その葉はサマ人とはほぼ同じようなプロセスで編まれ、敷物へと変身していく。また敷物と同じく、タコノキの葉から編まれる重要な道具が、航海カヌーの帆である。伝統



タコノキの葉を編んで製作されたチェエエメニ号の帆 (H0004975)



アタフ環礁島の女性がタコノキの葉を編む様子（ニュージーランド、トケラウ諸島、2008年）

的なオセアニアの航海カヌーでは、潮風にも強いタコノキの葉を編んだ帆がもつとも好まれた。クラ交易で有名なトロブリアンド諸島のクラ・カヌーも、また民博に展示されているサタワル島の大型航海カヌー「チェエエメニ号」の帆もタコノキの葉で編まれている。海の民にとって、バスケットリーは重要な漁具ともなり、航海道具でもあったことを示す好例であろう。